

『初霜便り』 ～子どもの側に立つ～

後志教育研修センター
所長 長谷川 誠



〈岩内一中・道徳の公開授業〉

今年度の研修講座は新型コロナウイルス感染症拡大防止の関係で5月・6月の研修講座は中止や延期、また集約開催（2日日程を1日日程に）、そして資料配付による代替など、様々な形としての開催を余儀なくされました。7月の音楽科講座から集合研修として、午後開催で開催することができ、9月からやっと予定通りの日程で開催することができました。あとは11月に国語科研修講座を残すのみとなりました。

今年度の特徴として、初任段階教員を中心とする若い世代の教職員の受講が多いのが目立ち、若い先生方の熱意を感じることができました。講座後のアンケートを幾つか紹介します。

- 「おそらく時間の関係で省略したことが数多くあったので、やはり時間を多くとってより詳しく聞きたいと思いました」（8月 社会科）
- 「コロナ禍の中でも一日日程で行えたことは非常に有意義であった。今後もこうした研修の場があれば積極的に参加したい。年代の近い先生方と交流でき、モチベーションにもつながった」（9月 学級経営-基礎）
- 「学級経営をどのように行うのか、結局答えはわかりませんでした。自分で考えて、色々な人に聞いて再考し続けたいです。どのようにしたら『心の扉』が開くのか、具体的な手立てや考え方を知りたかったです」（9月 学級経営-基礎）
- 「コロナ禍の中、柔軟に対応して開催していただき本当にありがたいと感じています。複数の講座を受講しましたが、どれも学ぶことが多く、「がんばろう」と意欲がわきます。ありがとうございます」（9月 読書活動）



〈明日の後志教育を担う若い先生方〉

研修講座の講義や開閉講式の挨拶を聞く真剣な眼差しから、若い先生方の熱心な姿勢を感じ取ることができました。しかしながら、どこか明日からの即戦力として使える指導技術的なものやhow to 的なノウハウを求めたがっているようにも見受けられました。

日本の茶道や武道などの芸道・芸術における師弟関係のあり方の一つに『守・破・離』という教えがあります。

『守』・・・師に言われたこと、師の流儀・型を習い「守る」こと

『破』・・・師の流儀を極めた後に、他流も研究し、自分に合ったより良いと思われる型をつくり、既存の型を「破る」こと

『離』・・・自己の研究を集大成し、独自の境地を拓き、型から「離れる」こと

まさしく、教育においても同様のことが言えます。自身の努力で自分が納得いくまで追究し、次に苦勞して実践し、そして失敗しながら身につけていきます。生徒指導・生活指導や授業を通しての子どもへの接し方、それは教わるものではなく、自身が体得することで一人前となって行きます。



〈人生の方程式〉

人から聞いた指導法ばかりを追っている、自分の指導技術は一見成長したかのように見えますが、本当の子どもの姿は見えてはいません。

教育という営みにはまず、子どもの姿があります。子どもの側に立ち、子どもの要求や関心、興味といったものを教師の目で見直して、より望ましいと考える方向に導き、最終的にどうやって成長させるか。子どもの側に立つ教育、これは教育の原点でもあります。